

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12489

研究課題名(和文) 終末期在宅独居療養者支援におけるインフォーマルサポートとの連携に関する研究

研究課題名(英文) A study on collaboration with informal support for end-of-life support for patients living alone

研究代表者

岡部 明子 (OKABE, Meiko)

東海大学・医学部・准教授

研究者番号：90287053

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：終末期在宅独居療養者支援における別居家族や友人、隣人、ボランティアなどのインフォーマルサポート活用の重要性の認識は高いが、存在の把握や負担軽減が課題として挙げられた。さらに独居療養者の在宅看取り事例の支援関係者(訪問看護師・介護支援専門員・インフォーマルサポート提供者)へのインタビュー調査から、独居療養者の意思確認とインフォーマルサポート提供者との緊密な連携により、その療養者らしい時間の創出につながる柔軟な支援が行われたことが示された。ホームホスピスへ入居した独居療養者への支援においては、新たな関係構築による生活の継続性と個別性を尊重した支援が希望の実現にとり重要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが国では単身世帯が増える中で、独居であっても終末期を在宅で過ごすことを希望する人々を支えるためのチームアプローチが不可欠となってきた。在宅医療関係者と介護関係者によるフォーマルサポートのみでなく、その人らしさをよく知る重要他者としてのインフォーマルサポートとの連携による支援ネットワークの構築が求められる状況が生じている。そこで、独居療養者が残された時間をどこでどのように過ごしたいと希望するかという本人の意思と、その療養者の生き方や価値観を尊重し、インフォーマルサポート提供者との緊密な連携によりその人らしい時間の創出につなげる支援のあり方が見いだされたことの意義は大きいと考える。

研究成果の概要(英文)：Although it is highly recognized that it is important to use informal support such as separated family members, friends, neighbors, and volunteers in support of terminal care providers at the end of life, grasping their existence and reducing the burden were mentioned as issues. Furthermore, based on an interview survey of persons involved in home-based nursing care for patients living alone (visiting nurses, care managers, informal support providers), we confirmed the intentions of patients living alone and worked closely with informal support providers. It was shown that flexible support was provided that helped to create time for the medical caregiver. It was suggested that support for patients who moved from living alone into the home hospice is important for realizing their hopes, with support that respects continuity of life and individuality by building a new relationship.

研究分野：在宅看護学

キーワード：終末期在宅独居療養者 インフォーマルサポート 連携

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

わが国では単身世帯が増える中で、独居であっても終末期を在宅で過ごすことを希望する事例を支えるためのチームアプローチが不可欠となってきた。しかし、独居者の場合、在宅医療関係者と介護関係者によるフォーマルサポートのみでは多様なニーズへの対応は難しく、特にその人らしさをよく知る重要他者としてのインフォーマルサポート(以下、IFS)との連携による支援ネットワークの構築が求められる状況が生じている。

2. 研究の目的

(1) 在宅独居療養者の最期まで自宅で過ごしたいという希望の実現を目指した、訪問看護師および介護支援専門員によるサポートネットワーク構築におけるIFSの把握と連携の方法、IFS活用に関する課題認識とその背景要因を明らかにすることである。

(2) ホームホスピスに入居した終末期独居療養者の最期まで自分らしい生活ができる場所で過ごしたいという希望の実現を目指した専門職による支援体制構築におけるIFSとの連携の実際、および活用に関する重要性、困難感、課題・役割認識を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 首都圏の人口20万人以上の市区町村にある訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所530か所を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は、在宅看取り事例のフォーマルサポート、IFSの把握方法・連携方法、IFS提供者の役割、IFS活用の重要性と困難さの程度、課題認識であった。事業所管理者には事業所のある地域のケアシステムの状況も尋ねた。さらに独居療養者の在宅看取りに関わった経験を有する支援者20名へ支援の実際と連携に関するインタビュー調査を実施した。

(2) ホームホスピスに入居した在宅独居療養者への終末期支援経験を有する支援者6名へ支援の実際と連携に関するインタビュー調査を実施した。

(3) 海外の終末期在宅独居療養者への支援状況の把握のために、スウェーデンのマルメ市において関係各所への視察および支援を提供しているフォーマルサポート関係職種およびIFS提供者へのヒアリングを実施した。

4. 研究成果

(1) 質問紙調査(127件の回答)からは、終末期在宅独居療養者支援におけるIFS活用の重要性の認識は高いが、IFSの存在の把握の困難さ、別居家族等の負担軽減等の課題が明らかになった。インタビュー調査からは、訪問看護師と介護支援専門員は、独居療養者の意思確認、信頼関係構築により把握できたIFSと緊密に連携し、IFS提供者はそれまでの療養者との関係性を基盤にニーズに沿った柔軟な支援により、その療養者らしい時間の創出につなげたプロセスが浮かび上がった。両者とも本人の明確な在宅療養意思に基づき状況を判断し、通常の役割範囲を拡大させ手段的・情緒的支援を提供していた。独居者の在宅看取りの実現の背景には、医療と介護のチームアプローチにIFSが加わり重要な役割を果たしていることが示唆された。

(2) ホームホスピスに入居し看取られた単身者3事例の関係者6名にインタビュー調査を実施した。最期まで自分らしく暮らしたいという希望を叶えるために、ホスピス管理者やスタッフが家族のような関係性を築きながら生活を支援し、友人などのIFSとの交流の時間を支え、IFSもスタッフと連携しながら関わりを継続した経緯が語られた。独居継続が困難となった先の居場所としてのホームホスピスにおいては、これまでの人間関係と新たな関係構築による生活の継続性と個別性を尊重した支援が希望の実現にとり重要であることが示唆された。

(3) スウェーデンにおける在宅療養者への支援については、行政、医療機関、ボランティアと様々な立場や機関の関係者からのヒアリングを行った。

行政と医療と介護の連携による支援システム

マルメ市における在宅医療と介護の連携についてヒアリングした。県とコミュニティという基礎自治体が保健医療契約の締結により在宅ケアに関する責任をシェアしており、ニーズに沿った支援を連携と役割分担により効率的に統合された一つのプランとして展開していることがわかった。特に終末期などの重症な時期には、県が「モバイルチーム」という在宅医療専門チームを組織して幅広い地域の療養者に対応しており、県とコミュニティの緊密な連携の効果が語られ、行政組織、医療機関・医療職種、福祉関係者とともにボランティア組織が連携をしながらそれぞれの役割を果たしていることがわかった。また、現在のわが国で課題とされている医療と介護の連携による地域包括ケアシステムの充実という面でも、在宅医療チームとコミュニティの介護関係職種との連携が行われており、さらに医療機関への入院の手配など、地域と医療機関をつなぐ役割も行政の医療チームが果たしていることがわかった。そうした有機的な連携は地域の開業医も含めた当番制で訪問診療にあたっており、24 時間 365 時間、途切れなくシステムとして、地域の医療・介護資源が有効に利用される仕組みが出来ていた。また、「安全アラーム」など緊急時対応体制が完備されている状況で、独居の療養者が安心して在宅で暮らすことができおり、在宅での緩和ケアの充実が、終末期ケアに参加する介護スタッフの安心にもつながるという視点は重要と考えられる。医療と介護がチームアプローチを展開することにより、効果的な支援が提供でき、独居であっても在宅で過ごすことができるという状況が実現している姿は、わが国の今後の地域包括ケアシステムの構築に際し、参考にすべき点が非常に多いと考えられた。

緩和ケアにおけるボランティアグループの活動

ルンド市におけるパリアティブケアに関する研究者からのプレゼンテーションを受け、様々な研究の変遷と今後の課題についての示唆が得られた。スウェーデンは一人暮らしが多いが、福祉国家が出来たときに、人権としてフォーマルサポートを受けて最後まで生きることが保障されるべきであり、ボランティアによる支援に頼るべきではない、という考え方になったが、やはり高品質なパリアティブケアを公的な支援に頼るのは限界があるという認識が共有され、これからは IFS としてのボランティア活動も組み入れてのケアシステムの構築が課題であることが語られた。また実際に地域でホスピスをつくりたいという目標をもってボランティア団体を立ち上げた方からのヒアリングでは、住民の声を自治体に伝える活動の意義が語られた。個々の療養者への IFS としての支援の提供にとどまらず、住民サイドが行政の施策に参画していく一つの事例として参考にすべき点が多いと考えられた。また、実際のボランティア活動の中身としては、話し相手やアクティビティと一緒に参加するなどの活動がされており、スウェーデンでは特に最近問題とされている、人々の孤独の問題へのひとつの解決策としての側面もあることがわかった。また、そうしたボランティア団体をつなげてまとめていく活動を推進しており、それにより地域のボランティア活動が行政のケアシステム構築に組み入れられることを目指していた。その背景には、深刻な診断を受け、終末期までの時間のうち、医療従事者と過ごす時間はわずか 5%であり、95%は普段通りの生活で友人と会ったりしながら日々の時間を過ごしているという研究結果からも、意味のある毎日の時間にするためのサポートをする IFS の役割の大きさが認識されていた。そのため、孤独を感じていると気づいたフォーマルサポートが IFS へつなげる橋渡し役を果たす意義、市民に対しての事前意思確認の方法や終末期支援に関する研修などの企画がされており、IFS との連携のあり方について見出していく上での参考となる方向性が示唆された。一方、新しい試みとして、インターネット上で療養者の家族や親しい友人などの立場

の人同士がマッチング機能を利用することでつながり、大切な人を亡くす経験を相互に共有し、精神的に支え合うような仕組みを立ち上げた方からもヒアリングを行った。3年間の活動により経験談を集める調査研究の結果として、そうした近親者の立場で身内の死を経験した人同士の支え合いにどのような価値があるのかについて分析し示すことができた」と述べていた。今後の団塊の世代が後期高齢者となりその後を訪れると予測される「多死社会」において、それらの近親者の悲しみを癒すための社会的な仕組みのひとつのあり方として、有効な方法と考えられた。

大学病院における緩和ケアチームの活動

マルメ市にあるスコーネ県大学病院内の高度訪問医療を行う在宅緩和ケアチームの医療スタッフからのヒアリングを実施した。このチームは県の予算で活動が賄われており、大学病院の中に拠点を置いているが、人事や採用などを含め独立した組織として活動をしているとのことであった。終末期で入院ではなく在宅療養を選んだ療養者に対して、疼痛緩和のための薬の調整、点滴や輸血など病院で行う医療とほぼ同じ内容を在宅にて多職種で24時間提供しており、小児の在宅ターミナルケアにも対応していることがわかった。そのような状況であっても、パーソンセンタードケアを実践し、本人だけでなく家族も丸ごとみていくことの重要性、そして終末期において特に焦点をあてる必要性が生じる「スピリチュアルニーズ」に対する支援についての実際の状況が語られた。それぞれの療養者が最後に残された時間に何をしたいか、どこに行きたいか、ニーズをくみ取ることの重要性、そしてIFSの提供者だからこそわかるニーズを連携により把握することの意味が認識されていることがわかった。

以上のようなヒアリングから、スウェーデンにおいては、施設から在宅へフォーマルサポートにより人々の希望やニーズに沿った支援の提供を組み立ててきた流れの行先として、ボランティアや近親者などのIFSとのつながりを組み入れることによる、高品質な終末期ケアのあり方の追求が志向されている状況が把握された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡部 明子
2. 発表標題 終末期在宅独居療養者支援におけるインフォーマルサポートとの連携の現状と課題 - 首都圏都市部の介護支援専門員へのアンケート調査より -
3. 学会等名 第24回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡部 明子
2. 発表標題 終末期在宅独居療養者支援におけるインフォーマルサポート活用の現状と課題
3. 学会等名 第23回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石原 孝子 (ISHIHARA Takako) (70580851)	東海大学・医学部・講師 (32644)	